

キャノングローバル戦略研究所（CIGS）

CIGS&スティムソン ジョイントセミナー

「トランプ大統領就任一年目がもたらした影響：米国および日本の
視点」

【要旨】

日時：2017年12月14日

場所：The Stimson Center, 1211 Connecticut Ave, NW, 8th Floor, Washington DC, 20036

2017年12月14日、スティムソンセンターとキャノングローバル戦略研究所（CIGS）は、ユーラシアでトランプ政権の外交政策が及ぼす地政学的影響に焦点を当てて、トランプ政権の一年目を振り返るパネルディスカッションを共催した。パネルディスカッションのモデレーターは辰巳由紀氏が務め、CIGSの宮家邦彦氏、共和党国際研究所（the International Republican Institute）のダニエル・トワイニング氏、ジョージ・メイソン大学およびスティムソン研究所のエレン・ライプソン氏がパネリストとして参加した。

辰巳氏は、トランプ政権の外交および国家安全保障政策のここまでの展開についてどう考えるかパネリストに意見を求め、ディスカッションを開始した。

宮家氏は、ヨーロッパ人はトランプを嫌っており、トランプの政策の一部、特にエルサレムをイスラエルの首都に認定した決定が中東に不安定な影響を及ぼしたことに注目して、悲観的な見解を示した。宮家氏は、政策立案の面でアジアは中東より安定している地域とみているが、「アメリカ第一主義」政策や中国を安心させるのかアジアの米国同盟国を安心させるのかで揺れ動くトランプ政権の傾向を日本は懸念していると述べた。

ライプソン氏は、トランプ大統領自身の成功の尺度は変化をもたらす代理人となる能力だと見なしているが、既存の秩序やプロセスの継続を認める一方で、エルサレム・ウェーバー（エルサレムへの大使館移転を6か月先送りする文書）に再び署名し、イランの核合意から離脱するなど挑発的な発言を行う傾向があると述べた。ライプソン氏は、北朝鮮は、トランプ政権が長期的課題をマネジメントする能力を示す重要な指標となるが、世界における変化の多くは、トランプ氏選出前から進行していた地政学的変化であると述べた。

トワイニング氏は、米国のエネルギー自給およびインドやアフリカの経済成長の見通しを考慮して、楽観的な見解を示した。トワイニング氏は、連邦議会メンバーはアメリカの同盟国と軍事作戦遂行能力を支援しており、大統領の発言は必ずしも政策の実施に直接つながるものではないと強調した。また、次の国家安全保障戦略では、世界の安全保障に脅威をもたらす海外の問題への対応に重点が置かれ、トランプ政権が北朝鮮問題に取り組むことを決定したことは評価されるだろうと述べた。

宮家氏は、トワイニング氏の発言に対して、特に北朝鮮に関して米国の指導者が米国の力を最大限に活用できる能力があるか疑わしいと述べた。ライプソン氏は、米国の力が適切に使用されなければ、力は委縮することもあり得ると同意した。トワイニング氏は、過去数人の米国大統領により既に勢力均衡は譲歩されており、それぞれの政権に学習曲線があったと主張した。

辰巳氏は次に、2018年および2019年に何が大きな問題になると思うかとパネリストに尋ねた。

トワイニング氏は、中南米のいくつかの政治的変革や選挙は米国自身の地域で起きると共に、イランの勢力に対抗するスンニ派連合を作るチャンスが中東で生じるだろう

と述べた。トワイニング氏は、欧州がポピュリストの動きを拒絶することを期待しており、中国が経済の減速にうまく移行できるかに関しては懐疑的である。

ライプソン氏は、短期的には北朝鮮が喫緊の問題と見ているが、日本やフランスが独自にそれを扱う余地を生む機会があることも指摘した。ライプソン氏は、ロシアが中東の一部地域で米国に取って代わる可能性を懸念し、米国が、海外で価値と民主主義や、古い考えだが未だ実現していないと指摘したスンニ派同盟の発展を促すことには悲観的であった。

宮家氏は、プーチン大統領が舵を取っているロシアが依然として問題を起こす可能性はあるが、もはや超大国ではないと指摘した。また、中東の情勢は、再指向もしくは単一の特徴づけを拒否する崩壊の過程であると見なした。アジアでは、米国と同盟国が中国の主張を抑止する方法を決められないため、中国は北朝鮮よりも大きな懸念となると論じた。

辰巳氏は、聴衆から質問を求めた。

Chris Nelson 氏は、北朝鮮に関するティラーソン国務長官の発言とそれを即座に非難するホワイトハウスとの間で無用な摩擦が起きているとコメントした。

Kevin Maher 氏は、米国が北朝鮮を核保有国と認定しても、日本は米国を信頼できる同盟国と見なすかと質問した。これに対して、宮家氏は、東アジアは北朝鮮を認知された核保有国として受け入れるようになる一方で、日本は核兵器を保有しようとはしないだろうと述べた。トワイニング氏は、核交渉中のイランに対する厳しい制裁措置に照らし合わせて、北朝鮮への制裁は完全に履行される必要があると付け加えた。ライプソン氏は、イラン人は北朝鮮人ほど世界から孤立しておらず、制裁解除に協力する動機がより大きいと警告した。また、米国はいまだに核保有国拡大の阻止を試みていると本当に信じており、北朝鮮を核保有国と認めない方が望ましいと考えていると指摘した。

辰巳氏は、討論に参加してくれたことに対して、パネリストと聴衆に感謝し討論を締めくくった。

以上